

田下駄やカンジキ型田下駄には、歯がない。しかし、佐々木長生氏がいうように、カンジキ型田下駄でも草の敷込みはできるのである。加藤芳朗氏が、灰色低地土には、養分が少ないため、草を敷込む、それに輪カンジキ型田下駄を使用したのではないかという説は、まさに卓見といえよう。なお、静岡市麻機の岩崎家に伝わる元治元年（1864年）の嘆願書には、「植付時節になつては、農人どもは大足と唱えております長さ1尺5寸くらいの板へ藤蔓をもつて緒をつけ、履物にして藻草の上をすべらし搔きならし代を作り、ようやく稻草を植付けます」とある。（小澤1979）すなわち、ここでいう「大足」の大きさは、上土遺跡のWA1とほぼ同じ大きさのものであり、文面からすると、板田下駄であつても、「大足」と呼ばれていたようである。しかも、その機能としては、代搔きを兼ねた草の作土中への敷込みである。そこで、いわゆる大足の他に、カンジキ型田下駄も、草の敷込みにも使われていたと考えてよいだろう。

また、A類の正方形型が、中層水田では見当らないことも検討したい。実は、3区のIT82や2区のIT81などは、やや縦長の長方形であり、A—4類と近い形状であり、機能もA類の代わりをしていたと考えられる。このA類を、大村1988は、「真四角型」と命名し、「潜る田下駄」とされ、動きの確保の他に、下層に冷水が存在する水田での足の保護も機能の一つとしている。ただし、IT82やIT81などは、下層水田でよくみられた4孔足首縛縛型ではなく、3孔の下駄式である。大村1988は、前者を「固定式」、後者を「突っ掛け式」と命名している。この「突っ掛け式」は、中層水田での、あらゆる形状でも採用されており、これも湿地化が、下層水田群よりも中層水田の方が弱いことを示しているのだろう。

ただし、下層水田に比べて、中層水田の湿地化が少ないとあっても、土質は、前者が泥炭質で粘りが少ないのでに対して、後者は粘土質で、粘気が強い。これより、下層水田では、板状田下駄であつても、足の上げ下げが楽にできるが、中層水田では、板状田下駄では、地面との接地面積が大きいため、足の上げ下げは、より難渋することが予想される。そこで、この問題を克服するために、接地面の隙間が多いカンジキ型田下駄の採用となつたと考えたい。近代まで使用されていた、板状田下駄でも、その裏面に桟状の細木を2本打ち付けたものが見られ、粘土との接地面での密着を避ける配慮と考えられる。このような発想が、カンジキ型田下駄の出現の際にも働いた可能性は捨てきれないだろう。

### 第3節 田下駄の面積と土質の検討

#### 1 板状田下駄の面積と土質

板状田下駄は、他の静清バイパスに關係する池ヶ谷遺跡、瀬名遺跡にも多数の出土例がみられる。そこで、弥生時代中期後葉から古墳時代初頭のものの表面積を計測し、面積の分布を図16に示した。残念ながら上土遺跡は、完形品が少なく、表面積が計測できたものは22点（表16参照）であった。このグラフでは、200～1450cm<sup>2</sup>までを50cm<sup>2</sup>ごとに区切り、その中に各遺跡計測数の何%が分布しているかを表している。表面積の平均は池ヶ谷遺跡は977.9cm<sup>2</sup>、上土遺跡は745.8cm<sup>2</sup>、瀬名遺跡726.6cm<sup>2</sup>となる。表面積の分布は、上土遺跡では700～800cm<sup>2</sup>と1000cm<sup>2</sup>前後にピークがあり、池ヶ谷遺跡や瀬名遺跡のように1100cm<sup>2</sup>を超えるような大型品はない。池ヶ谷遺跡では、950cm<sup>2</sup>以上にピークがあり、瀬名遺跡では500～700cm<sup>2</sup>と900～11,050cm<sup>2</sup>にピークがある。

以上のことから、表面積の平均値においては、上土遺跡は、池ヶ谷遺跡と瀬名遺跡の中間の極めて瀬名寄りであることがわかる。また、分布の特色も、2つのピークを持つところなど、上土遺跡と瀬名遺跡とは、よく似ていることがわかる。これに対して、池ヶ谷遺跡では、他の2遺跡とは異なり、一つの明瞭なピークを持つ。

これらを、どのように理解したらよいのだろうか。現在の表層微地形分類では、池ヶ谷遺跡付近は安倍川扇状地の末端であり、標高は約10mである。また、瀬名遺跡は、長尾川の扇状地の末端にあり、標

表 16 下層水田出土の田下駄計測表

NO.	タ イ プ	登録番号	区	縦全長 (cm)	横全長 (cm)	面 積 (cm <sup>2</sup> )
1	A-2	W 739	2	24.3	17.3	375.6
2	A-4	W 740	2	22.4	(17.3)	345.3
3	A-4	W 873	2	(21.8)	(19.6)	389.1
4	A-4	W1560	3	28.2	28.0	737.9
5	A-4	W1561	3	24.6	24.3	554.5
6	B-4	W1122	3	19.7	30.0	556.8
7	B-4	W1453	3	20.5	32.6	639.0
8	B-4	W1455	3	24.3	39.9	882.0
9	B-4	W1668	3	20.0	24.0	452.7
10	C-1	W 830	1	21.5	49.0	984.2
11	C-3	W1120	3	21.7	51.0	1002.7
12	C-4	W599 W643	1	17.0	42.3	675.4
13	C-4	W 817	1	(16.6)	49.0	768.8
14	C-4	W 576	2	16.8	48.7	790.4
15	C-4	W634 W635	2	21.5	49.1	1016.1
16	C-4	W 701	2	17.4	48.6	829.4
17	C-4	W1033	3	18.8	62.3	1085.0
18	C-4	W1433 W1434	3	17.1	48.0	793.9
19	C-4	W1450	3	20.4	54.5	971.0
20	C-4	W1454	3	21.9	53.3	1098.3
21	D-II	W1028	2	42.9	18.6	735.1
22	D-II	W 730	2	44.8	17.9	725.3

(%)

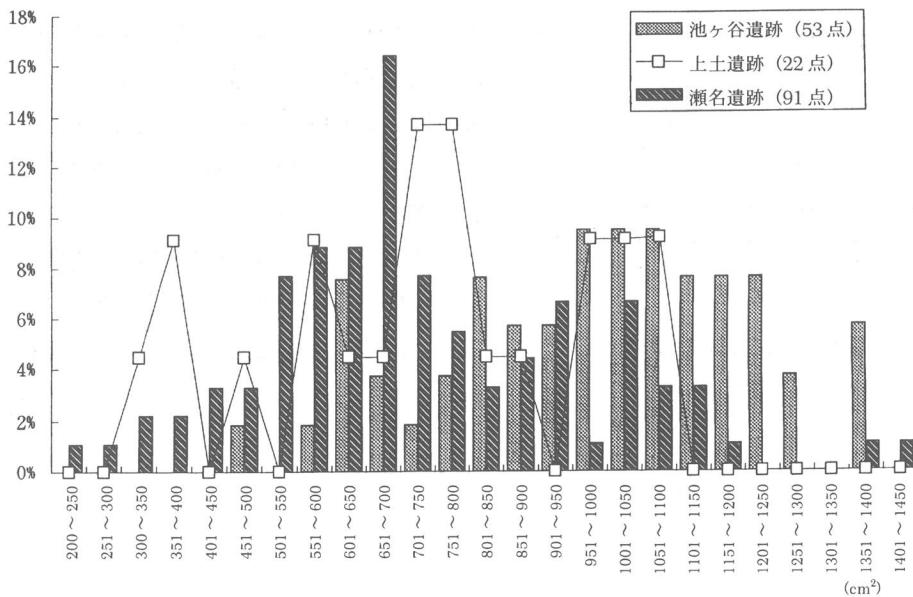


図 16 池ヶ谷・上土・瀬名遺跡の弥生中期後葉～古墳前期水田出土の板状田下駄面積分布比較図

を示すことである。第1の理由は、古墳時代前期の埋没構面の高さが、上土は瀬名より8mも低いなど、湿地化されやすい条件も備えていたためと考えられる。第2の理由は、上土遺跡の初期水田が杭列

高は約12mである。それに対して、上土遺跡（立石地区）は、麻機低地の南東部であり、標高は約7mである（以上の標高は、昭和33年測図都市計画図より）。ところが、弥生中期後半から古墳前期の土壤をみると、いずれも泥炭質の暗色粘土である。問題は、ほぼ同質の土壤であっても、このように板状田下駄の表面積が、池ヶ谷が、瀬名・上土の約1.3倍である理由、あるいは、瀬名と上土がなぜ似ているのかという点である。その解答は、下層土にあると考える。筆者の観察では、上土と瀬名では、これらの水田耕作土の下層土はもっと泥炭質の粘土であり、泥炭そのものであるが、池ヶ谷は、泥炭質の下層土が、約1mほどあり、その下位に砂礫が位置していた。しかし、瀬名・上土の両遺跡の場合、泥炭質の下層土は、50cmもなく、下位の砂礫と接していた。ここに、最大の原因があろう。上土遺跡の下層土下部の砂礫は、長尾川の西支流路の飛石川が運んだ砂礫（加藤芳朗氏からの御教示による）であり、上土遺跡の下層水田の基盤を構成していたのである。それにひきかえ、池ヶ谷には、安倍川の砂礫の供給が少なく、上土よりも、もっと湿潤な、後背湿地となっていたのである。瀬名・上土がよく似た基盤土層に立地するので、田下駄のパターンも似てきたのではないだろうか。

なお、瀬名・上土の両遺跡の類似点について述べたが、異なる点を2つあげたい。第1に、上述の2つのピークは、いずれも上土は、瀬名より、面積がやや大きい数値を示すこと。第2に、瀬名では小面積のものは少ないが、上土では、比較的に大きな割合

畦畔ではなく、盛土畦畔であり、大きな面積の田下駄を比較的必要としなかった点に求められるかもしれない。

## 2 輪カンジキ型田下駄の面積と土質

さらに4遺跡で輪カンジキ型田下駄の面積を比較するために、緊縛間の距離を測定し、その個体数の割合をグラフ化したのが図17である。上土遺跡の資料数は20点と少ないので残念であるが、上土遺跡の輪カンジキ型田下駄の総平均は40.28cmで、40～45cm未満に10点(50%)とピークがあり、岳美遺跡とほぼ同じである。池ヶ谷遺跡と瀬名遺跡は、30～35cm未満にピークがあり、上土遺跡よりも10cm短く、小さかったといえる。

下層水田とは異なり、律令期以降の水田では、上土遺跡と瀬名遺跡の相違が目立つ。瀬名は小面積であり、上土はそれよりも広い面積となる。これは、瀬名が砂質土を基盤とする環境であるのに対して、上土は粘土もしくは泥炭質粘土を基盤とするからである。この上土遺跡の傾向は、岳美遺跡とも共通している。また、上土と岳美の共通点には、瀬名よりもなお、小面積の田下駄がやや多い点もある。これは、より乾田的な環境で中層水田の開発が行なわれたことの証拠かもしれない。また、大村1988のいうように、女性や子供が使用したものかもしれない。なお、池ヶ谷遺跡であるが、大きなピークが瀬名と同じく小面積のところにあり、同時に上土よりも大きな面積のところにもピークがある。これは、遺構編でも述べたように、上土遺跡よりも埋没標高が、約1.5m高く、下層土に砂礫が多い環境が瀬名と

共通しているが、平安海進の影響で、湿地化が徐々に進行するなかで、畦畔の増強と湿田耕作が行なわれたと考えられる。そこで、上土以上の湿地的な環境にいたってもなおかつ耕作し続けた結果、より大面積の輪カンジキ型田下駄が必要となったものと考えられる。同様な傾向は岳美遺跡西部でも見られるので(『岳美遺跡I』1995、『岳美遺跡II』1996)、ここでもより大面積の輪カンジキ型田下駄が出土していると考えられる。

このように、土壤環境が同一遺跡でも、下層水田と中層水田では大きく異なることが明らかとなった。

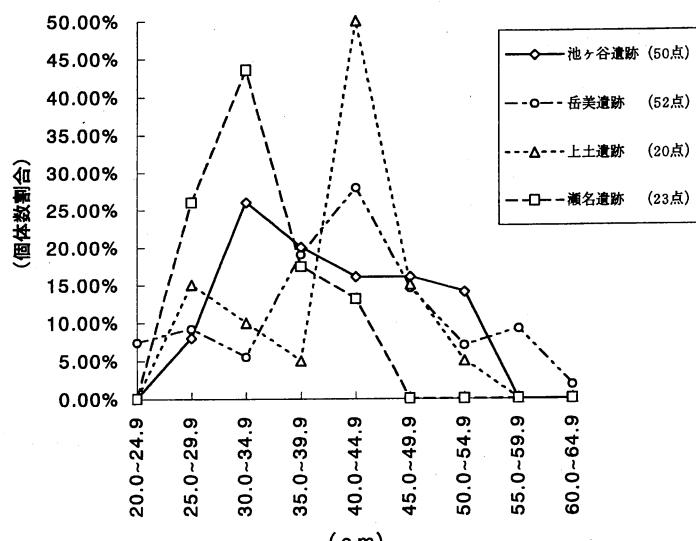


図17 4遺跡輪カンジキ型田下駄の緊縛部間距離

### 【引用文献一覧（引用初出順）】

- ・矢田勝 1993 「泥炭・粘土の圧密化の問題」『研究紀要IV』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- ・阪口豊 1984 「日本の先史・歴史時代の気候」『自然』5月号
- ・静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996 『岳美遺跡Ⅱ（遺物編）』
- ・静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997 『曲金北遺跡Ⅰ（遺物編）』
- ・北川浩之 1995 「屋久杉に刻まれた歴史時代の気候変動」『講座文明と環境 第6巻 歴史と気候』 朝倉書店
- ・浜島繁隆 1979 『池沼植物の生態と観察』 ニュー・サイエンス社
- ・静岡県 1992 『静岡県史 資料編 考古三』
- ・八木勝行 1996 「志太平野の律令社会」『静岡県考古学シンポジウムX 古代駿河国律令社会考—資料集一』 静岡県考古学会シンポジウム実行委員会
- ・静岡県教育委員会 1989 『静岡県文化財調査報告集 第42集 静岡県の窯業遺跡本文編』
- ・和田晴悟 1989 「漁労具 土錐・石錐」『弥生文化の研究5 道具と技術Ⅰ』 雄山閣
- ・静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995 『岳美遺跡Ⅰ（遺構編）』
- ・静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992 『池ヶ谷遺跡Ⅰ（遺構編）』
- ・中山正典 1994 「田下駄の形態変遷と機能」『瀬名遺跡Ⅲ（遺物編Ⅰ）』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- ・黒崎直 1985 「農具 くわとすき」『弥生文化の研究5 道具と技術Ⅰ』 雄山閣
- ・奈良国立文化財研究所 1985 『木器集成図録 近畿古代編』
- ・中山正典 1993 「農具と水稻農耕」『研究紀要IV 水田跡調査の方法と研究』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- ・潮田鉄雄 1988 「田下駄の変遷」『湿田農耕』 岩崎美術社
- ・静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994 『瀬名遺跡Ⅲ（遺物編Ⅰ）』
- ・静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993 『池ヶ谷遺跡Ⅱ（自然科学編）』
- ・奈良国立文化財研究所 1993 『木器集成図録 近畿原始編』
- ・宮田登 1979 『神の民俗誌』 岩波書店
- ・阿部猛 1995 『万葉びとの生活』 東京堂出版
- ・御殿場市史編さん委員会 1982 『御殿場市史 別巻I 考古・民俗編』
- ・静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993 『御殿川流域遺跡群Ⅰ』
- ・静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989 『大谷川Ⅳ』
- ・神野善治 1983 「四ツ手網考—伊場遺跡出土の十字形木製品をめぐって」『物質文化』第41号 物質文化研究会
- ・飯塚武司 1991 「鉄鏃—その時代性と地域性—」『研究論集X』 東京都埋蔵文化財センター
- ・静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992 『川合遺跡遺物編2』
- ・本川根町教育委員会 1994 『大島遺跡の話 平成5年夏の調査記録』
- ・鈴木道之助 1981 『図録 石器の基礎知識Ⅲ 繩文』 柏書房
- ・江坂輝彌・芹沢長介・坂詰秀一編 1983 『日本考古学小辞典』 ニュー・サイエンス社
- ・可児弘明 1984 「伝統中国の祭り」『日本民俗文化大系 第9巻 曆と祭事—日本人の季節感覚—』 小学館
- ・大村和男 1988 「民具と出土農具の接点—低湿地農具にこめられた自然認識と動作—」『日本考古学協会 1988年度設立40周年記念静岡大会研究発表要旨』 日本考古学協会
- ・小澤誠一 1979 「江戸時代の浅畑通り村々」『麻機誌』 麻機誌をつくる編集委員会